SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

寛政の三奇人と遊歴の時代

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒川, 紘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000484

寛政の三奇人と遊歴の時代

荒川　紘

「寛政の三奇人」とよばれてきた林子平、高山彦九郎、蒲生君平の歴史的意義が問われる機会はすくない。戦前には日本史の教科書でも模範的な愛国主義者として特筆され、戦後になると狂信的な愛国主義者と誹謗されたこともあったが、今ではほとんど忘れられた人物となっている。しかし、変革の時代を生きた彼らがどう思索し、どう行動をしたかに目を遣れば、けっして忘れ去られてよい人間ではないことが教えられる。「奇人」の意味も考えなおさねばならない。

彼らは著作や日記を残しているものの、書斎の人間ではなかった。大名に仕えもしなかったし、藩校で教えることもなかった。合理の眼をもつ経世家の林子平、情熱的な壮士であった高山彦九郎、古制の研究に尽力した蒲生君平の三人は三様の人生を送りながら、共通して遊歴の人間であった。それだけでも人々の目には「奇人」と映じたかもしれない。しかし、それは表面的な「奇」である。むしろ、旅をとおしてさまざまな人々から直に学び、みずからの目で社会の現実を直に視る。そこから思索し、発言する。言動がきびしく制限されていた時代に、自己の意志をもって国のありかたについて発言し、行動する。この態度こそが「奇」と見えたのではなかったのか。

彼らの提言は受け容れられなかった。それどころか、『海国兵談』で洋式海軍による海岸防備、とくに日本の中枢である江戸湾周辺防備の必要性を説いた林子平は処士横議の廉で処罰される。京都の公家たちと交流して尊王論を鼓吹していた

高山彦九郎も、尊王論の立場から天皇陵墓の研究を『山陵志』にまとめた蒲生君平も幕府からは危険人物視されていた。

しかし、幕府はまもなく子平の線に沿った沿岸防備の手を打つことになる。そのような状況のなかで彦九郎や君平と交わりをもっていた水戸学の人々を中心に尊王論の運動が高揚、それは討幕運動となって全国の志士を衝き動かす。歴史は彼らが時代の先覚者であったことを証明してくれる。

幕府も体制のゆきづまりを座視していたのではない。田沼意次の改革の失敗についで寛政時代に登場した老中松平定信も改革に全力をあげる。教育改革にも取り組む。幕府は、尾藤二洲、柴野栗山と岡田寒泉（後に古賀精里）のいわゆる「寛政の三博士」を儒官に登用、幕臣向けの試験制度を導入するとともに、林家塾を幕府直轄の昌平坂学問所に移管、組織の拡充をはかる。

しかし、「博士」たちは新しい時代を生み出す力にはなれなかった。時代を先導したのは経学の権威であった「博士」たちではなく、遊歴に生きた「奇人」たちだった。そのような「寛政の三奇人」がどのような歴史的役割を演じたのかを考えてみたい。そして、遊歴が修業であった彼らの教育観にも耳を傾けたい。

1　変革の時代(一)

林子平（一七三八―九三）、高山彦九郎（一七四七―九三）、蒲生君平（一七六八―一八一三）が活躍したのは一八世紀の後半から一九世紀の初め、田沼意次・意知父子と松平定信が実権を奮っていた時代である。京都の朝廷では、桃園天皇のあと、後桜町天皇と後桃園天皇をへて、閑院宮家から迎えられた光格天皇が三九年間在位していた時期にあたる。

一八世紀に入ると農業生産は増加、それによって拡大した商品経済は都市を繁栄させ、江戸や大阪を中心に文学や芸術

の花も咲かせた。しかし、商品経済の拡大は農民だけでなく武士階級の生計にも打撃をあたえ、幕府も財政の立て直しを迫られるようになる。徳川吉宗は倹約令と新田開発・殖産興業によって財政再建に取り組んだが、一七六七（明和四）年に側用人となり一七七二（安永元）年に老中となって幕政の実権をにぎった田沼意次は新田開発・殖産興業の路線をひきつぎ、商人資本の協力によって、というよりも幕府権力と特権商人との結託によって財政の立て直しを図ろうとした。工藤平助の『赤蝦夷風説考』をもとに蝦夷の未開地を開発し、ロシアとの交易によって利潤をあげようともしている。

しかし、経済活動は活発になっても、それで潤ったのは特権を有した大商人だけ、民衆の生活は以前にもまして苦しくなる。本百姓経営の体制がくずれて逃散する農民も増え、農村は荒廃する。天明年間に入ってつづく冷害、浅間山の噴火、洪水がそれに拍車をかけた。徳川時代の成立から一五〇年ほどのあいだに約二〇〇〇万から約三〇〇〇万に増加した日本の人口も減少に転じた。一七八四（天明四）年の東北の大飢饉のときには、仙台藩では餓死者と疫病死者は三〇万人におよび、盛岡藩の死者は住民の二割に達した[1]。農村では一揆が頻発、都市でも米価が高騰、各地で米騒動が発生する。

武士もその本分を忘れる。独裁者の田沼意次・意知父子のもとでは儒教の倫理など通用しない。忠義は賄賂の多寡で量られた。政治の外にいた民衆からも怨嗟の声があがる。一七八四年に江戸城中で意知を斬殺した旗本の佐野善左衛門は切腹を命じられたが、民衆は佐野を「世直し大明神」とよんで、喝采を送った。農村の荒廃と士風の崩壊、幕藩体制を支えていた基礎が根底からゆらぎはじめたのである。

そのようななかで、文学や芸術だけでなく、学の世界の活動も活発となった。本居宣長の国学、杉田玄白や前野良沢の蘭学、それに理気の哲学で君臣上下の秩序を説く朱子学に批判的な伊藤仁斎や荻生徂徠の古学を生み出した。学問の目は古代と西洋に注がれる。政治の面では、行政の技術を重視する徂徠学に人気が集まり、幕府でも藩でも徂徠学派や徂徠学と朱子学を折衷させた折衷学派の人材が登用されるようになる。役に立つ儒学者が歓迎された。それに、技術としての蘭

学も注目されるようになる。

だが、その一方では、京都では朱子学に日本の神話思想や尊王論をむすびつけた山崎闇斎を祖とする崎門派が儒者のあいだで勢力をひろげていた。その学統からでた竹内式部（一七一二―六七）は公家の徳大寺家に仕えるかたわら、徳大寺公城（きんむら）や久我敏道らの公家たちに『日本書記』の神代巻を講じ、過去においては主権は天皇にあったことを一〇〇人を超える門人に説いていた。これらの公家たちは侍講の伏原宣条（のぶえだ）をとおして竹内の説を桃園天皇に進講させてもいた。受講した公家のなかには権力の回復を実現させようとするものも現われる。[2] だが、朝廷も一枚岩ではない。幕府との関係が悪化するのを危惧する公家は幕府に告訴、その結果、一七五八（宝暦八）年にはそれに関わった公家が解官・謹慎の処分をうけ、竹内式部は重追放となった。宝暦事件である。

しかし、尊王思想は江戸にもひろがる。江戸で塾を開いていた山県大弐（一七二五―六七）も山崎闇斎の影響をうけた儒学者で、宝暦事件の翌年の一七五九（宝暦九）年には孟子の革命論を肯定した『柳子新論』を著わして幕府打倒の可能性を論じていた。「たとひ、その、群下にあるも、善くこれを用ひて以てその害を除き、而して志その利を興すにあれば、則ち放伐また且つ以て仁となすべし。他無し、民と志を同じうすればなり」。[3] 臣民でもそれを善用して人民の害を除き、人民の利益を興すことに志があれば、君主を放伐することも仁となる。ほかでもない、それは人民と志を同じくするからである。儒教の立場からも、民衆の支持があれば、天皇親政にむけた幕府打倒は許されるのだ。民衆のあいだに沸き起こっていた世直しの運動に、理論と目標が示されたのである。

大弐の塾には数百人の門弟が集まった。そのなかには上野小幡藩の家老吉田玄蕃もいた。藩政改革につとめていた玄蕃の反対者からの密告がもとで、一七六七（明和四）年大弐は死罪となる。それに関係したとして、宝暦事件に連座した藤井右門も磔刑、竹内式部も遠島となった。この明和事件が起ったのは、田沼意次が側用人となった年である。意次の子の意

知を斬った佐野善左衛門が「世直し大明神」とよばれる前から、世直しの運動は深く潜行していた。

2　変革の時代(二)

田沼意次は意知が殺された二年後、後ろ盾であった将軍徳川家治が世を去ると失脚、御三家に推されて徳川吉宗の孫で白河藩主の松平定信が老中として登場する。定信の寛政の改革は、田沼の政策とは逆に、倹約令と歳出の切り詰めによって財政の立て直しをはかり、士気民風の匡正で政治体制を確立しようとした。

士気民風の匡正ということでは、海防を提言した林子平にもおよんだ出版の統制が強化される。政治批判を題材にして多くの読者を獲得していた洒落本作家も筆を折る。なお政治を風刺した洒落本を書いていた山東京伝は手鎖五〇日の刑をうけた。大衆の支持をえた浮世絵界でも、当代きっての人気絵師であった喜多川歌麿は「太閤五妻洛東遊観之図」が時の将軍家斉の大奥生活を風刺したものとして幕府の諱忌にふれ、京伝とおなじく手鎖五〇日の刑に処せられた。

統制は思想にも向けられた。幕府は徂徠学や折衷学の台頭に押されていた朱子学を「正学」と位置づける。一七九〇（寛政二）年には、儒学者の柴野栗山と岡田寒泉を聖堂取締りに任じて、林家塾と幕府関係の教育機関では「正学」である朱子学以外の「異学」を教育することを禁じ、それによって民心統一をはかろうとした。聖堂取締りには、早くから異学の禁を主張していた尾藤二洲が加わる。尾藤二洲、柴野栗山と岡田寒泉の、いわゆる「寛政の三博士」の登場である。

それを具体化したのが一七九二（寛政四）年に制定された「学問吟味」である。三年ごとに成人（一五歳以上）の幕臣を対象として朱子学の経書の解義を中心とする試験であった。翌年には少年（七歳から一五歳まで）を対象とする「素読吟味」が加わった。大学頭の林信敬が一七九二年に亡くなると、美濃岩村藩主の松平家から林家の養子となった述斎が大学頭に就

任、岡田寒泉が常陸の代官に転出すると、佐賀藩の儒官であった古賀精里に交替する。

一七九三（寛政三）年に定信は老中を退くが、それ以後も、林述斎のもと尾藤二洲、柴野栗山、古賀精里を中心に定信の路線に沿って林家塾の改革がすすめられた。一七九七（寛政九）年には、林家塾は幕府直属の教育機関となって、昌平坂学問所と称されるようになる。「学問吟味」「素読吟味」の準備教育も担っていた。昌平坂学問所は幕臣の子弟を対象とする学校として出発したが、まもなく入学を各藩の藩士にも拡大する。一八〇〇（寛政一二）年には新校舎の落成をみ、毎日「素読吟味」に応じた素読教育が行なわれ、日をさだめて「学問吟味」に応じた解義教育がおこなわれた。(4)「異学の禁」の狙いは徂徠学や折衷学を排除するところにあった。冢田大峯、赤松滄洲、亀田鵬斎、山本北山、市川鶴鳴ら徂徠学・折衷学の「異学の五鬼」の抵抗もあったが、朱子学の勢力は回復する。「異学の禁」は直接藩校にむけられたのではなかったが、藩の方では幕府をはばかり、徂徠学・折衷学の採用を避けるようになった。

しかし、幕藩体制の矛盾は解決しない。国防の問題も深刻さを増す。ロシア人の蝦夷近辺での活動は頻繁となる。林子平を処分してまもなくロシアの使節ラクスマンが漂流民の大黒屋光太夫を送り届けるとともに、江戸入港と通商を求めてきたのを機に、幕府は海防強化に力を入れはじめ、一七九八（寛政一〇）年には近藤重蔵らを派遣して千島の探査にのりだした。内政では出稼ぎを許可制にしたり、飢饉に備えて籾の貯蔵を命じたりして、農村人口の減少を食い止めようとした。それによって、一揆・打毀しの数は減ったが、規模はむしろ大きくなった。根本の解決にはほど遠かった。

定信が「泰平二百年、只おそるへきは蛮夷と百姓の一揆也」（『函底秘説』一八二五年）とのべていたとおりである。幕府も藩も内憂外患への対応に追われていた。

それに、ふたたび朝廷が自立への動きを見せるようになる。幕府には、内憂外患に加えて、朝廷の問題が浮上する。宝暦・明和事件では尊王論者を処分、表面的には尊王運動は影を潜めたが、尊王の動きが消えたのではない。夭折した後桃

園天皇には男子がなかったので閑院宮家から皇位に就いた光格天皇は儒教の仁にもとづく君主意識が強く、それまで途絶えていた朝儀を復活させるなど、朝廷の権威の強化につとめた。一七八七（天明七）年、天明の飢饉で餓死者の出ていることを知った光格天皇は関白をとおして幕府に窮民救済の実施を申し入れた。これまでは、朝廷が幕府の政策に口出しすることなどまったくなかった。これを承けた幕府は京都奉行所に命じて一五〇〇石の救い米を放出させている。[5]

光格天皇は林子平の『三国通覧図説』を読むなど、外夷の動向にも関心をしめし、賀茂神社と石清水八幡宮の臨時祭の復活に熱意を燃やし、実現させている。[6] 臨時祭というのは国家危機にさいして天皇が神々に祈願する祭祀である。

政治には口をださない天皇ではなくなった。一七八九（寛政元）年には光格天皇は実父の閑院宮典仁（すけひと）親王に「太上天皇」（上皇のこと）の尊号を贈ろうとして幕府に許可を求めた。松平定信はそれに反対、幕府は「なお再考を求む」との回答をし、事実上拒否をしたのだが、天皇側は対幕府強行派の関白一条輝良（てるよし）、儀奏中山愛親（なるちか）、武家伝奏正親町公明（きんあき）の布陣で強行突破をはかろうとした。最終的には幕府が反撃にでて、実現はしなかったのだが、朝幕の関係は確実に変化していた。

一七八九（寛政元）年、この年高山彦九郎は江戸にいたが、翌年には奥州を遊歴して京都に入る。その彦九郎を追い、奥州に向かった蒲生君平は彦九郎には会えなかったが、林子平と磐城の湯本で懇談ができた。その前年、『三国通覧図説』が光格天皇の叡覧にあずかったとの知らせをうけた林子平は、朝廷に海防策を上申するために上京、中山愛親に会っている。

3　林　子平

林子平は一七三八（元文三）年、旗本で小納戸役兼書物奉行の職にあった林良通の次男として江戸に生まれた。吉宗が将軍の時代である。子平が三歳のとき父が刃傷事件を起こし士籍を除かれ江戸を離れたため、町医であった叔父の林従吾に

あずけられた。しかし、仙台藩主の伊達吉村の侍女にあがった姉のなほが吉村の嗣子で藩主を継いだ宗村の側室になり、そのため、叔父が仙台藩より三〇人扶持を受けることになり、叔父の死後は兄の嘉義が継承、二〇歳の子平も部屋住みの身となる。三人のなかでは体制にもっとも近い人間であった。

子平が幼少時代にどのような教育をうけたかはっきりしていない。藩校に入学したかどうかも不明である。私塾に通った形跡もない。和漢の学に通じていた父の教育もうけられなかった。ただ、子平が一六歳のとき江戸にもどった父は子平兄弟に武士としての生き方をさとした訓諭文をあたえている。そこには、「閑暇の時は何に寄らず、書を読可レ申候、古書を専らに読可レ申候事」、「朱儒の理屈におちいり、己が規矩を立て人を咎め申間敷候事」とある。[7] 読書・文章を学問の第一としながらも、朱子学の学者のように理論を先にたて、他人を咎めることがあってはならない。その訓諭の影響からでもあろうか、子平は現実から学ぶことを重視する。江戸から仙台に移ってからの六年間は、領内を遊歴して、学政や武備にかんする藩政改革の意見書を仙台藩に上申している（第一上書）。が、藩は部屋住みの子平の上書をとりあげることはない。

しだいに子平の関心は藩から国防の問題、当時ロシア人が進出していた蝦夷にむけられるようになる。この件では友人である塩釜神社の社人・藤塚式部から学ぶところが多かった。[8] たとえば、現在の蝦夷との国境は松前にあるが、多賀城碑の碑文の「去蝦夷国界一百廿里」の一二〇里は日本式の里では二〇里（一里＝三六町＝約四キロメートル。碑文の里では一里＝六町）、そこからは、かつての蝦夷との国境は桃生郡（宮城県北部）にあったと推定、その後国境は北に移動したとの認識をえた。[9] 蝦夷についても現地を確かめねばならない。一七七二年には蝦夷地に渡ったとも伝えられている。

二六歳のとき江戸に遊学、以来しばしば江戸に出向く。部屋住みの身分のゆえ、届け出だけで自由に旅行ができた。速足で、仙台から三日で江戸に到着したとの「奇行」的な伝説も残されている。最初の江戸行きのときに林家塾の門を叩くが入門していない。江戸では主に大槻玄沢・宇田川玄随・桂川甫周ら蘭学社中関係者と交わったが、とくに影響をうけた

のは江戸在住の仙台藩医工藤平助であった。工藤平助がロシアの南下を指摘するとともに、蝦夷の開発とロシアとの貿易の必要性を訴えた『赤蝦夷風説考』は幕府に建白されたもので、子平は読めなかったが、その内容については平助から聞かされていたと推察される。江戸の遊学で、意識は世界の中の日本に広がる。

『解体新書』が刊行された翌年の一七七五年、三八歳の子平の足は洋学のメッカ長崎にむかう。長崎遊学中は武術の観点から、洋式の馬術や馬の飼育法を学び、また、世界地図を作成して仙台に持ち帰っている。世界地図は通詞の松村元綱が所有していた地図を借用し模写したもので、二つの円で描く大型（畳一枚大）の彩色地図である。長崎遊学とはいっても、蘭学者をめざしたのではない。通詞とつきあっても、オランダ語を修めようとはしていない。目標は治国安民にあった。

その二年後にも、長崎奉行の柘植長門守の従者として長崎に遊歴する。杉田玄白や前野良沢の師でもあった通詞の吉雄耕牛とも親交をむすび、その関係で本木良永、松村安之丞といった通詞と知り合い、本木良永所蔵の『輿地国名訳』をはじめ、各種の地図を写した。また、商館長フェイトの知遇をえ、ハンガリー人ベニョフスキーのもたらしたロシア人の動向をふくめ、海外の地理、形勢についての情報を収集することもできた。一七八一年には三回目の長崎遊学、このときの主目的は『三国通覧図説』の付図のために各種の資料を収集することであった。それによって、『日本遠近外国之図』が作成される。長崎滞在中に『阿蘭陀船図説』を刊行しているが、このオランダ船の研究は『海国兵談』の基礎ともなった。

そうして『三国通覧図説』の稿が成ったのは一七八六（天明五）年、翌年に刊行された。朝鮮・琉球・蝦夷および小笠原群島の地理・風俗を解説、加えて、ロシアがカムチャツカから南下して蝦夷に侵略するのを警告する。その提言は老中・松平定信には採択されなかったが、光格天皇の叡覧を浴し、それ知った子平は上京した。

つづいて、一七九一年には外国からの侵略への軍事的対策を論じた『海国兵談』を刊行する。そのなかで、子平はいう、「窃（ひそか）に憶へば、当時長崎に厳重に石火矢を備有りて、却て安房・相模の海港に其の備なし。此の事、甚だ不審（いぶかし）。細に思へ

ば、江戸の日本橋より唐、阿蘭陀まで境なしの水路なり。然るを、此に備へずして長崎にのみ備る何ぞや」[10]。日本は海に囲まれた海国、その防備の要は海防にあり、わけても江戸周辺の沿岸を大銃（おおづつ）をもって防備せねばならないと主張する。この兵法とともに、軍事力の強化には、古代ではそうであったように、武士の土着や民兵制の採用を提唱する。

ロシアたいする認識では兄事していた工藤平助と見解が分かれる。平助がロシア人の蝦夷来航の目的が交易にあると見ていたのだが、子平は領土的野心があるととらえた。開国論の平助にたいして攘夷論の子平、医師の経世家と武士の経世家の違いでもあろうか。

『海国兵談』の出版には難儀したが、友人の藤塚式部の援助があって三〇部の印刷ができた。子平は世に訴えるほかなかったのである。ところが、幕府は子平の警世の声を聴こうとしないどころか、子平を江戸に召喚、処士横議の廉で、『海国兵談』の版木没収と兄宅蟄居という厳罰に処する。「取留も無之風聞又は推察を以て異国より日本を襲候事可有之趣奇怪異説取交せ著述致し」たというのである[11]。武士とはいえ、部屋住みの身、無官の人間が幕政に口を出すとはなにごとか、分をわきまえよ。『三国通覧図説』も発禁没収となった。一七九三（寛政五）年、子平は蟄居中に病没、仙台・北山の龍雲院に葬られた。

4　高山彦九郎

高山彦九郎も生涯を旅に生きた。江戸、京都、水戸をはじめ、諸国を遊歴、そこで尊王の大義を説きつづけた。死の三年前の四四歳のときには蝦夷をめざして東北を旅行、仙台では林子平にも会っている。その足で、京都に直行して二〇〇日あまり逗留、反幕的な公家たちと交流した後、江戸や京都での知己をたよりに、久留米や熊本をたずねながら薩摩に向

かった。薩摩を離れてからは、九州各地をめぐった後に久留米にもどり、当地で自害する。子平はその六日前に没している。彦九郎には著作というものがない。しかし、死の二日前まで、詳細な日記を書きつづけていた。

彦九郎は一七四七（延享四）年上野国新田郡細谷村に農民の第二子として生まれた。農民とはいえ豪農、祖父と父からは、祖先は新田義貞の家人であった高山遠江守で、新田義貞の鎌倉攻めにも参加したと教えられていた。一五歳のとき伊勢崎の松本晩翠の塾に通い、陽明学と闇斎学を学び、書籍の購入のために江戸にも出掛けたという。

すでに少年彦九郎の心には尊王の念が芽生えていたからであろう、一七六四（明和元）年、一八歳のとき遺書を残して出奔、京都に遊学する。このとき三条大橋の上で皇居を跪拝したことは、彦九郎の「奇行」としてよく知られることとなる。「東山のぼりて見ればあはれなり　手の平らほどの大宮どころ」はこの上京のときの一首。三年間、京都・大阪で、皆川淇園（私塾弘道館塾主）、中井竹山（懐徳堂学主）、頼春水（山陽の父）、片山北海（詩社・混沌社主宰）、西依成斎（私塾望楠軒塾主）、菅茶山（詩人として著名）、井沢謙（播州高砂の処士）らの儒学者と交遊する。

一七七〇（明和七）年、二四歳のときには江戸の大叔父宅に寄寓、折衷学の権威であった細井平洲の嚶鳴（おうめい）塾に入門する。同時に、江戸では鉄砲洲の中津藩邸内の前野良沢・達父子宅に入り浸っていた。杉田玄白や工藤平助のところにも出入りする。徂徠学や折衷学に人気が集まり、蘭学の勃興した田沼時代である。彦九郎も時代の潮流に惹かれたのであろう。学問的にはとくに尊王論と関わるところはない。しかし、江戸の学者との交遊だけではない、江戸を拠点に、関西、関東、東海の諸国を遊歴するが、そのなかに近江の藤樹書院と熊沢蕃山が幽閉されていた古河の訪問がふくまれていたのは注目される。

一七七五（安永四）年には、遠江から尾張・伊勢・大和を遊歴したのち、京都に赴く。二度目の上京で、本格的な尊王運動の開始であった。このとき、彦九郎二九歳、帰国に際して、柴野栗山、皆川淇園、井沢謙といった碩儒からの送別の詩

が残されていることからも、京都では一個の志士として遇されていたことがわかる。柴野栗山の「送高山序」には「喜んで天下の奇人偉士を観る」「余、因りて大に奇士異境を得たり」とあるように、すでに「奇人」「奇士」であった。

その柴野栗山との縁で水戸学の関係者との交流が生まれる。当時堀川で塾・古愚軒を営んでいた柴野栗山を訪れていた常陸の地理学者長久保赤水のところに彦九郎が招かれたのである（赤水は栗山から日本地図の序をうけるために上京）。その後、赤水は水戸藩主徳川治保の侍講となり、江戸の水戸藩邸に住んだので、江戸でも彦九郎と赤水との交遊がはじまった（遅れて柴野栗山も幕府の儒官として江戸に移る）。

時代は田沼意次の時代、農村では打毀しが頻発する。そのようななかで、彦九郎は一七八二（天明二）年に三度目の上京、高芙蓉（甲州出の儒者で篆刻家）の家に草鞋をぬいで、伏原宣条や岩倉具選（ともかず）といった公家との交遊を重ねる。伏原宣条は明経博士の清原家の出で、桃園天皇の侍講として宝暦事件に関わりながら光格天皇の侍講をつとめていた。岩倉具選は後桜町天皇の側近だった公家で、柳原家から竹内式部の高弟で宝暦事件に連座した岩倉尚具の養子となり、後桜町天皇の側近であった（岩倉具視の曾祖父にあたる）。崎門派の公家との交流がひろがる。

京都で一七八三（天明三）年の正月を迎えた彦九郎は、天皇が出御する節会などの朝儀を拝観するとともに、有力者を訪ね大義名分を鼓吹する。尊王斥覇勢力の拡大のための教育を充実させる目的で学習院（大学寮）の再興を提言、伏原宣条や彦九郎の京都での師となっていた高辻胤長（たねなが）らと具体化について話し合う。大阪の懐徳堂の中井竹山の協力を求めるために大阪に出向くこともあった。しかし、竹山の支持はえられなかった。そのような彦九郎を光格天皇が知るところとなる。

三月になると京都でも米騒動・打毀しが起こり、彦九郎は岩倉具選とはかり、富豪を説いて窮民救済に奔走する[12]。公家たちが、幕府に代わって行動する（その後、一七八七年には、朝廷は幕府に窮民救済を申し入れる）。

四月に入り、長久保赤水からの便りで、利根川の氾濫による上州水害の惨状を知り、帰国して救民にあたる。一七八六

（天明六）年まで故郷にあったが、しばしば江戸にも赴く。水戸学者との交遊もひろまる。長久保赤水が立原翠軒に彦九郎を称賛する書を送ったのが機縁で、翠軒の門弟である藤田幽谷も知る。赤水から依頼されて、幽谷は彦九郎の祖母の米寿を賀する詩を作っている。その依頼文のなかでも彦九郎は「奇人」とよばれていた。一七八九（寛政元）年には江戸で暮らし、憂国の志士たちとの交わりも密になって、江戸に出てきた林子平とも会っている。[13]

この年、江戸の水戸藩邸内の赤水宅で幽谷とはじめて顔を合わせた。幽谷一六歳のときである。彦九郎が赤水を訪ねたとき、そこに立原翠軒に連れられてきた幽谷と高橋広備（彰考館館員）と同席したのである。そこで彦九郎は幽谷と夜を徹して談じたが、このとき、幽谷は長文を認めた。これが後期水戸学の記念碑的な論考『正名論』の草稿となったと見る人もいる。[14]

立原翠軒と長久保赤水の周囲からは幽谷をはじめとする多くの尊王攘夷論者が育ったが、翠軒と赤水はとくに尊王論者でも攘夷論者でもなかった。学究肌の人間であった。翠軒は江戸では徂徠派の大内熊耳や折衷派の細井平洲に学び、赤浜（現高萩市）に生まれた赤水は地元手綱の医師鈴木玄淳と水戸の名越南溪に師事している。彦九郎は二人の学識に学ぶことはあっても、政治思想と行動については別であったろう。逆に、水戸学者たちは彦九郎から教えられることが多かったのではなかろうか。とくに、京都において天皇主権の回復を持論としていた公家たちとの親交があった彦九郎である。尊王攘夷論者藤田幽谷の誕生に彦九郎が大きな役割を演じ、会沢正志斎らも育った。

一七九〇（寛政二）年五月、四四歳の彦九郎は蝦夷への渡航をめざした北方の旅にでる。江戸水戸藩邸の赤水に挨拶して出立、房総海岸をめぐり、銚子から鹿島神宮をへて、水戸に入り、立原翠軒宅に二泊、幽谷も訪問して尊王の大義をめぐる議論をかわした。彦九郎は、「一正（幽谷）と大義の談有ける。一正能ク義に通ず。存慮の筆記を見す同しくは公よろしからんと示メしけるに忽チ筆を取りて改めける、才子の達す、奇也とてよろこび語る事ありける」と、一七歳の幽谷の才能

を評価する言葉を日記に残している。[15] そのとき、彦九郎と幽谷とのあいだでは中江藤樹と熊沢蕃山の陽明学者師弟について議論が交わされたことを彰考館の同僚である石川桃蹊が幽谷から聞いた話として書き残していた。[16] 後年、幽谷は『熊沢伯継伝』を書き、「士君子の学は、当に文武を兼ね資り、諸を事業に施し、以て天職を供すべし」とも、のべていた。

幽谷と別れた彦九郎は太田の北の天下野（現茨城県水府町）の医師で探検家の木村謙次宅に宿泊している。[17] 謙次は一七八五（天明五）年に東北の旅行を企てていた。このときには仙台の林子平を訪ねた様子はないが、子平の友人である塩竈神社の藤塚式部に逢っている。日記には、この夜に近くの岩手村の孝子乙吉の伝記を写したことが記されているが、国防についての議論があり、また、北の旅の心掛けについても教えを受けたにちがいない。

その後、彦九郎は大中宿から奥州棚倉藩の雨谷に入り、米沢の興譲館に寄った後、日本海沿いに歩いて蝦夷をめざした。九月には津軽の先端宇鉄に着く。蝦夷には渡れなかった。帰路は、久慈、盛岡をへて仙台に出るが、この間、彦九郎は天明の飢饉の惨状を聞き知らされ、また実見することになる。『北行日記』は天明の飢饉の調査記録としてもよめる。彦九郎の旅の目的が初期の蝦夷の探査から庶民の生活の実態調査に変わったかのようである。

仙台には一〇月二一日から八日間留まり、林子平にも会っている（すでに『三国通覧』を公刊、『海国兵談』書き終え、翌年刊行）。さらに塩釜にも足をのばして藤塚式部を訪ねる。途中、多賀城碑にも立ち寄っている。このころ、江戸から蒲生君平が彦九郎を追ってきたが、出会えなかった。ただ、その後、一一月一五日には下野の黒羽に寄って、君平の師である鈴木武助を訪ねる。彦九郎の日記には見られないが、武助の『農喩』には彦九郎からの報告として奥州の飢饉の惨状がのべられている。[18]

その後、その足で京都に急ぐ。一一月三〇日に京都着。在京二二〇余日、岩倉具選邸に滞留することが多かった。再建された皇居にしばしば参内、節会その他の行事を拝観している。伏原宣条、西洞院時名（宝暦事件に連座）と嫡孫の信庸らと

の交遊が多い。この上京中、郷里の家族を生家に帰したり、叔父に託すなどする。そのために、前野達は江戸から細谷に出向いている。

朝廷でも新しい動きが生まれていた。君主意識の強く、途絶えていた朝儀や神事を復活させるなどにつとめて朝廷の権威を強化しようとしていた光格天皇は、一七八七（天明七）年に窮民救済を幕府に申し入れ、一七八九（寛政元）年には前例を破って父の閑院宮典仁親王に太上天皇の尊号を贈ろうとした[19]。

一七九一（寛政三）年三月、尊王運動で奔走していた彦九郎のことを光格天皇の知るところとなり、それを聞いた彦九郎は感涙する（寛政三年三月一五・六日の日記）。四月には琵琶湖で捕れた緑毛亀（みのがめ）を伏原宣条の手をへて天皇に供した。緑毛亀は「天子文治の聖徳」に感応して出現するもの、武断政治から文治政治への移行の吉兆と見ていたのである。

この年の一七九一（寛政三）年七月に尊号事件の決着を見ないまま、西遊の途に上り、久留米で自害するまで九州の各地を遊歴する。彦九郎は日記にもその目的を記していないが、船橋則賢や富小路貞淑の送辞に「高山氏薩州に赴くを送る」と文句がみえるように、薩摩をめざしたのは確かである[20]。

山陽道をへて九月に九州に入り、中津から久留米をへて長崎に遊び、海路熊本に入り、一〇〇日余り滞在する。京都で交友のあった西依成斎の故郷である肥後には崎門派の同志が多かった。伏原宣条の知己も住んでいた。熊本では西依成斎の門下生で旧友の籔狐山（前時習館教授）宅に宿泊、時習館教授の教授たちと旧交を温め、医学校・再春館の教授の富田大鳳とも交遊する。大鳳は反幕の情熱に満ちた人物であった。

翌年の一七九二年四月、薩摩にむかう。このとき熊本藩から二〇両の餞別をうけている。野間の関で阻止されるが、江戸で面識のあった是枝良成の仲介で薩摩にはいることができた。

彦九郎の薩摩行の目的はなんであったのか。尊王論の鼓吹だけでなく、覚悟をもった行動であったように思われる。三

上卓は薩摩藩に倒幕の義軍を募るための密議をもつためであったとのべている。[21] もちろん、京都の公家たちと意を通じてのことであろう。それに、薩摩の造士館の助教には籔狐山の門弟で、江戸では彦九郎と心を通わしていた赤碕海門がいた。藩主の信頼があつい改革派のリーダーであった。しかし、薩摩藩も一枚岩ではない。藩主斉宣（なりのぶ）と隠居重豪（しげひで）の対立があり、それは造士館の教官にも及び、助教の赤碕海門派と教授の山本正諠派の対立となっていた。学派でいえば闇斎派と徂徠派の対立であった。

鹿児島には三カ月滞在する。だが、初期の目的は不首尾に終わったようだ。一七九三（寛政四）年六月、薩摩を離れる。薩摩藩から餞別をうけ、四国に向かう。しかし四国には渡らずに、竹田をへてふたたび熊本にむかい、八月から翌年四月まで豊後、筑前を彷徨う。その間、長崎に入り、そこでは大通詞の楢林重兵衛と親しくなる。楢林は林子平の知己でもあった。そのころ子平は蟄居の刑をうけていたことは、彦九郎も楢林も知らなかったであろうが、子平の仕事のことは話題になったであろう。楢林の紹介で通詞末席の名村恵助とも交流をもつ。

一七九四（寛政五）年の四月には久留米にもどり、六月一九日久留米市外の櫛原村の医師の森嘉膳宅に宿泊、六月二七日に自刃する。四九年の生涯であった。同月二一日、仙台では林子平が蟄居のまま死去していた。

彦九郎はなぜ薩摩に赴き、久留米で自害したのか。嘉膳は検視には「狂気なり」と答えている。遺書は残されていない。嘉膳になにを語ったか、嘉膳によれば、なにも語らなかったという。私たちは想像ができるだけである。

嘉膳の宅地内に仮埋葬された石棺は、この年の一一月に久留米の同志たちによって久留米の遍照院に移され、墓碑が建てられた。戒名は「松陰以白居士」。

5　蒲生君平

蒲生君平は下野の人、一七六八（明和五）年宇都宮城下の灯油屋の子に生まれた。このとき子平は三一歳、彦九郎は二二歳であった。体制からは遠い町人の生まれであるが、蒲生氏郷の末裔である誇りを終生もちつづけた。一九歳のときには姓を福田から蒲生に変えている。

六歳のころから城下の延命院の住職から読み書きを習ったのち、一三歳で鹿沼の儒者鈴木石橋の麗沢之舎に入塾、一七歳のときには石橋の勧めで黒羽藩の鈴木武助にも学ぶ。石橋は昌平坂学問所に学び講じてもいたが、帰郷して私塾の教育にあたっていた儒学者である。天明の飢饉にさいしては救民事業にも尽力したという。[22] 鈴木武助は彦九郎も北行旅行の帰途に訪れた農政学者である。

武助の門に入った翌年には水戸に赴き、一二歳の藤田幽谷（一七七四―一八二六）を知る。彦九郎が幽谷と会う四年前である。宇都宮藩も黒羽藩も水戸藩に近く、石橋も武助もふだんから立原翠軒や木村謙次らとの交流があったであろう。そのなかで、君平は幽谷に引き合わされた。蒲生氏郷の末裔とはいえ灯油屋の子であった君平には水戸の古着屋に生まれの幽谷に親しさを覚えたにちがいない。二人とも私塾で才能を開花させた町人の子であった。江戸時代において私塾のはたした役割を物語ってもいる。君平はその後もしばしば那珂川の船便を利用して水戸に出向く。

幽谷をはじめとする水戸の学者との交流から尊王論者君平が育つ。幽谷の門人であった会沢正志斎は『及門遺範』のなかで、「先生（君平）は、『春秋』尊王攘夷の義に原づき、最も名分を謹み、君臣上下の際、夏夷内外の弁は之を論ずること極めて鮮明、行文措辞、其の名分に渉るものは片言隻字と雖も、未だ曾て容易に筆を下さず」とのべていた。[23]

一七八九（寛政元）年に君平は彦九郎と江戸で出会っている。[24] すでに彦九郎と交流のあった幽谷の紹介であろう。この年には子平も江戸におり、彦九郎は子平に会う機会があった。しかし、君平と子平との出会いがあったかどうかは不明。とにかく、この年、三人は江戸にいた。

その翌年、奥州への旅にでた彦九郎を追尾した君平は彦九郎をとらえることができなかったが、塩釜に立ち寄って、藤塚式部に会い、仙台の林子平宅を訪ねている。そのとき子平は不在、しかし、それを知って磐城の湯本まで追いかけてきてくれた子平と面会ができた。

一七九二、三（寛政四、五）年になると宇都宮と江戸の間を往来、折衷学の大家で寛政異学の禁では寛政の五鬼（異学の五鬼）の一人として反対を唱えた山本北山の奚疑塾（けいぎ）に入門する。このころから『今書（きんしょ）』を書きはじめたらしい。古代の制度を学ぶことから、当世の政務を論じようとした経世の書である。歴史的な考証の重視は徂徠学や国学にも見られた時代の潮流であったが、君平もその潮流のなかにいた一人であった。

『今書』で君平はいう。今日江戸と城下は賑わうが、そのため諸大名の経費とくに江戸屋敷の経費はいちじるしく嵩み、その結果、農民からの取り立ては苛酷となる。そこで、農村の人口は減り、田畑は荒れ、豊作の年でも穀の備蓄ができない。歴史的にみても、今日のように農民が困苦する時代はなかった。かつての律令制のもとでの班田制に倣った改革をせねばならない。新田を開発し、武士を帰農させ、それによって農民の賦役を軽減するとともに、他方では、農民の土地の所有を制限して、貧富の差を少なくする。政治の基本については古代の祭政一致を理想とし、宗廟・山陵を尊ばねばならないとし、最後に、儒教教育の振興を説く。師の鈴木武助と同様に、君平にとっても政治の無策のために荒廃した農村の復興が最大の課題であった。君平はそれを国政に拡大して考える。

そして、『今書』ではとりあげられていないが、君平の関心には君平を彦九郎を追い奥州に向かわせた北方の国防の問題

もあった。それが君平に三度もの奥州遊歴をさせたのである。二度目は一七九五（寛政七）年、ロシア人が大船でウルップ島を侵犯した年である。水戸に出た君平は天下野村に寄り木村謙次をたずねる。彦九郎が木村を訪ねた五年後である。木村の探検談を聞いただけでなく、二年前に久留米で自刃した彦九郎を追悼したであろう。君平と幽谷の交流がその後長くつづいたことは、一七九八（寛政一〇）年の北方探検からの帰途、宇都宮に立ち寄り君平と会っていることからも明らかである。そのときにも謙次は南部から塩釜にでて、塩竈神社の藤塚式部を訪ね、式部の求めに応じて、石巻の多福院の近くにあった蛇塚の碑文を撰している。仙台の林子平は二年前に亡くなっていた。

その後、君平は一七九八年に三回目の奥州旅行、水戸を経由したが幽谷は前年藩に提出した「丁巳封事」のために謹慎を命ぜられていた。塩釜の藤塚式部にも会えなかった。当時神仏混淆であった塩竈神社で式部は垂加神道を信奉する立場から仏教側と対立、それがもとで生じた問題で幽門中だったのである。君平はその式部を救おうとして運動するが、式部は翌年配所で病没する。

こうして、古代の研究と水戸の幽谷たちとの交遊によって君平の尊王論は確固なものとなる。友人であった滝沢馬琴の君平評伝『蒲の花のかたみ』のなかで、君平を「むかしは儒官あきらかに天朝の故実に通じて、六経をもてこれが資にしたり。こゝをもて名正しく、事行われざることなし。今の俗儒は天朝の故実をしらず、夏夷逆順の理に暗くして、名を乱り言を紊るもの一五六十年来比々として皆これなり」と書いていた。[25]

会沢正志斎も『及門遺範』で「蒲生君蔵（君平）も亦務めて典故を講究し、発明する所往々人の意表に出づ」とも、「先生（幽谷）も亦数々君蔵の特見、前後儔罕なるを嗟称す。其の来遊する毎に、門人をして就いて質問せしむ。曰く、奇士を得て従遊せば以て才気を長ずべし。而うして門人益を得る者、亦尠からずとなす」とものべていた。[26] 幽谷は「奇士」君平の学識を高く評価し、幽谷とその門人たちは多大な感化をうけていたというのである。

そのようななかで、尊王論者の君平は山陵研究に傾注してゆく。彰考館で『大日本史』の編集事業の関わっていた幽谷がその成果を期待していたのはいうまでもない。二度目の奥州旅行の翌年の一七九六年、山陵調査のための西遊を前にして、藤田幽谷や木村謙次が君平をかこむ酒宴を水戸で開いている。立原翠軒からは餞別をうけ、いったん宇都宮に帰郷して、京都にむかった。

二〇〇日を超える長期間の調査が可能であったのは、翠軒からの餞別も含め、君平の仕事を支持する知己友人の財政的な援助のおかげでもあったようだ。京都では、歌人の小沢蘆庵（もと尾張犬山城主竹越家の家臣、冷泉為村の門人となる）に世話になる。京都近郊の山陵から探索を開始したが、比叡山にのぼったときには「比叡の山見おろす方ぞあわれなる　今日九重のかずしたられば」との歌を残している。京都からは、丹波・丹後をへて、隠岐（後鳥羽天皇陵）にも渡り、南下して摂津・河内・和泉に入り、大和を調査する。そのさい伊勢に本居宣長を訪ねてもいる。

その後三度目の奥州旅行の三年後の一七九九年にも西遊、山陵調査を続行する。この二回目の調査では四国の阿波（土御門天皇陵）・讃岐（崇徳天皇陵）、淡路（淳仁天皇陵）に渡り、大和、河内を探索して京都にもどる。このときにも本居宣長を訪ねている。その後、佐渡（順徳天皇陵）を経て、帰省、『山陵志』の執筆にとりかかり、一八〇一年に稿がなる。三四歳のときであった。天皇陵の所在だけでなく、研究はその様式の変遷にまでおよぶ。「前方後円墳」の命名は君平による。この年、君平は林述斎の門下となる。このときは正式な入門であって、すでに教えをうけていたらしい。

君平は『山陵志』を『大日本史』の「志」に採用してもらうことを希望していた。「志」は人物本位の本紀とは別に、祭祀、礼楽、刑法といったように項目によってまとめたもの。「山陵」も欠かせない。が、幽谷は一七九七年に「丁巳封事」のことで謹慎、『大日本史』の編集の職も解かれていたこともあって、それは実現しなかった。山陵研究を徳川光圀の念願であった山陵の補修につなげようとしていたが、それもかなわなかった。そこで、柴野栗山に『山陵志』を献呈、幕府を

動かそうとしたが、それも功を奏さなかった。[27]

そこで、『山陵志』を世に出そうとした。この出版にも苦労するが、江戸・石町に住む友人の鍵屋静斎らの援助で刊行にこぎつけた。幕府や公家の有志にも献本できた。しかし、一八〇六（文化三）年にはこのような出版は処士のなすべきことではないとして町奉行から出頭を命ぜられている。これには答申書と提出して不起訴処分となったものの、幕府の要注意人物となっていた。

一八〇四（文化元）年から江戸に落ち着き、私塾での教育（六年間は駒込の吉祥寺門前で、その後は日本橋に移る）に携わりながら、著述に専念する。黙々斎と称し、寓居を修静庵と名づけた。山陵の調査と執筆は終わり、「静を以て身を修め」（『小学』）ようとしたのだが、政治にたいする関心が止むことはない。水戸にでかけては幽谷と時局について論じあっていた。そこから生まれたのが一八〇七年に稿のなった『不恤緯』である。一八〇四年にはレザノフが長崎に来航するなど、ロシアの侵寇がますます激しくなるなかで、幽谷らとの議論をもとに、国防にたいする対策を総合的にあつかっていた。『今書』が内政に向けられたのにたいして、『不恤緯』はそれを外交にも拡大する。

『不恤緯』で君平はいう。ロシアの侵寇がわが国をおびやかしている今こそ国の弊を改めねばならないときである。その政治の基本は、上は皇室を尊び、名分を明らかにし、下には仁政をほどこし、民の苦しみを除くことにおかねばならないが、同時に、幕府も藩も財政を切り詰め、軍事を強化することが肝要である。それには惰弱な武士をあてにするのではなく、堅強な民兵を用いるべきである。『今書』で述べられていたことである。この点でも範は古代の国体と兵制から学ぶのがよい。そして、海防の重要性を指摘、武士の土着や民兵の採用を提唱した子平の先見性を称え、「林子平を幽死せしむるの冤、天下の忠義、之を何とか謂はん。それ、宜しく、その墓を祭りて、その霊に謝すべし」とのべていた。[28]

『不恤緯』は西や北への遊歴を踏まえて書かれた尊王と国防を統一的に論じた書である。国防に心血を注いだ林子平と

尊王思想の鼓吹に生涯を賭けた高山彦九郎を受け継いだ論考ともいえる。『不恤緯』は公刊されなかった。「草莽之臣秀実（君平）」から若年寄の水野忠成（のち老中）への献上書である。為政者への提言の書である。

君平は政治の範を律令時代にもとめた尊王論者であっても、天皇に政治の実権を移すべきとは主張しない。幕藩体制にたいする認識では私淑する彦九郎とは差がある。尊王攘夷論者ではあっても、討幕論者ではなかった。最後まで尊王敬幕論にたつ幽谷ら水戸学のグループの人間であった。西遊にさいして二度も訪ねている本居宣長の政治思想もまた尊王敬幕的であった。

君平が『山陵志』を刊行した一八〇六（文化三）年に、「下野国草莽無名氏」の名で皇室を軽んずる幕府を弾劾する「幕罪書」が流布することもあった。「下野国草莽無名氏」からは蒲生君平が想像されるが、実際には君平の名をかたった者の文書と見られている。幕府当局は君平の師の林述斎に君平の糾問を命じているが、述斎も無実であることを保障している。それでも、君平を反幕の志士と考える空気が存在していたのである。

君平の古制の研究はひろい領域におよび、『山陵志』のほか『職官志』と『刑志』の稿が完成していた。一八一〇（文化七）年には『職官志』の出版の協力要請のことで京都にも赴いてた。結局、日光・輪王寺の海成僧都からの義捐（三〇両ほど）によって、全体の五分の一に相当する第一巻を出版することができた。『刑志』の稿は未刊行のまま、友人に貸した稿は失われた。『職官志』も全巻の刊行を見ることなく、一八一三（文化一〇）年俄に没す。行年四六歳。友人たちによって、上野・谷中の臨江寺に葬られた。

6　攘夷論と尊王論――水戸学への影響

江戸時代において、「寛政の三奇人」はどう評価されたのか。

幕府は一七九二年に林子平の『海国兵談』の版木を没収、蟄居の刑に処したが、外国船の襲来は止まない。四カ月後にはロシアの使節ラクスマンが根室に来航すると、幕府は諸藩に海防を命じ、定信は伊豆と相模海岸を巡視している。子平を権力で処罰しながら、その提言にそっての対策を講じる。権力者の哀しい姿である。さらに一七九八年に近藤重蔵らを千島に派遣、探査させる。一八〇八年には間宮林蔵に樺太を探査させる。林子平の線で進行した。君平は『不恤緯』で海防論の先覚者子平に謝し、追賞するべきであるとのべていたが、幕府もようやく一八四一（天保一二）年になって、一八二二（文政五）年付けの赦免状を子平の継承者のところに届けた。

その後も幕府は子平に助けられた。ペリーの来航のときの日米交渉でアメリカ側が小笠原群島の領有権を強硬に主張してきたとき、この危急から日本を救ってくれたのが『三国通覧図説』であった。幕府はこのフランス語訳（一八二八年、パリの東洋研究協会刊）を所有しており、そこに記されている記事を根拠として日本の領土であるとする幕府の主張にアメリカ側も引き下がった。

木村謙次の蝦夷探検に見られるように、北方の動きに敏感であった水戸藩でも、藩の沿岸に異国船が出没するようになる。一八二四（文政七）年にはヨーロッパの大国イギリスの捕鯨船の船員が大津浜に上陸、そのとき会沢正志斎は交渉に筆談役で立ち会っている。幽谷も子の藤田東湖に侵入者は斬るべしとして現地に向かわせようとしていた（交渉の結果、捕鯨船は大津浜を離れ、東湖は現地に向かうことはなかった）。正志斎が尊王攘夷運動のバイブルとなる『新論』を執筆したのは、その直後である。

林子平が攘夷論の本場となる水戸を訪ねることはなかったが、水戸の人々は子平を高く評価していた。木村謙次は一七九三年に蝦夷に渡ったときには蟄居中の子平に面談、一八〇三（享和三）年には『海国兵談』をもとに海防策を論じた『海防下策』を著わしている。子平が亡くなった年にも菩提寺の龍雲院を詣で、「祭林子平文」を作っている。[29] 藩主の徳川斉昭は子平が赦免されたとき、墓参のために家臣を仙台にくだしている。[30]

しかし、幕府は有効な手を打てない。水戸藩は攘夷を唱えるだけでなく、自藩での海防に乗り出すとともに、鋳造した大砲を幕府に贈呈するなどして幕政の攘夷断行を迫った。それでも幕府は動かない。それどころか、大老井伊直弼は勅許をまたずに日米修好条約に調印する。そこで、水戸藩士たちは桜田門門外に直弼を暗殺する。

高山彦九郎と蒲生君平は幕末の水戸藩を動かした水戸学の尊王論に新しい精神をもたらしてくれた。会沢正志斎は藤田幽谷を育てた人間として師の立原翠軒や学兄である木村謙次らとともに、彦九郎と君平をあげ、「少年より交わる所、一時の豪傑、高山仲縄（彦九郎）、君蔵（君平）の如き慷慨天下を憂ふる、毎に肝膽を以て相許す」とのべていた。[31] 水戸学の伝統をうけつぎながらも、彦九郎と君平との交流が重要であったことを語っていた。なによりも、彦九郎は京都の朝廷の生きた姿を伝えてくれ、君平は代々の天皇の陵墓を探索した。書物で学んだ尊王論に血と魂をあたえてくれたのである。

だから、彦九郎と君平を敬愛しつづけた水戸の人々は彦九郎の憤死の九カ月後の一七九四（寛政六）年三月に彦九郎の弔祭を執行、二〇歳の幽谷は彦九郎の憤死を聞いて、彦九郎に長文の奠詞をささげ、木村謙次も「祭高山仲縄文」をつくっている。[32] 幽谷の門下生である杉山忠亮は『高山正之伝』を書いた。

君平の死にさいしても、幽谷と正志斎は「蒲生先生墓誌」を撰した。彦九郎の伝記を書いた忠亮には『蒲生君平伝』もある。君平の生前には全巻の刊行ができなかった『職官志』についても、一八一六（文化一三）年に輪王寺の海成僧都からの資金をもとに水戸の同志が協力して上梓できた。それには正志斎が跋文を書いている。

吉田松陰も「三奇人」に心を惹かれた人間であった。なかでも彦九郎には早くから関心を抱いていたようで、萩から江戸の遊学、佐久間象山の塾生となっていた吉田松陰は一八五一（嘉永四）年五月、会沢正志斎の『高山彦九郎伝』を読み、それに彦九郎を「武士たるものの亀鑑此の事と存じ奉り候」と評した手紙を添えて兄の杉梅太郎に献呈している。[33] その年の暮れ、松陰は彦九郎が同じように国防上の視察の目的をもって奥州の旅に出た。水戸での一月ほどの滞在中には会沢正志斎らの水戸学の学者を訪ねるとともに銚子と鹿島神宮にも足をのばした。水戸を立った翌日には手綱（現高萩市）の槍術師範・阿久津彦五郎の案内で赤浜にある長久保赤水の墓に詣でた後、奥州棚倉藩に入り、若松を通り日本海に出て津軽まで北上する。帰路は盛岡で塩竈神社を参拝、多賀城碑も見て仙台に入り、仙台では藩校の養賢堂を訪問、米沢をへて江戸にもどった。

そのコースは同じく国防の視察が目的であった彦九郎の歩いたコースとほとんど同じである。銚子と鹿島神宮も彦九郎が水戸に入る前に立ち寄ったところである。塩竈神社も多賀城碑もそうである。彦九郎は長久保赤水に挨拶して奥州の旅に出立したが、赤水はこの世の人ではない、そのかわりに赤水の墓を詣でたかのようである。そして、松陰も蝦夷には渡らなかった。

この類似性は偶然とは思われない。松陰は日記には彦九郎のことには触れていないが、三年後の一八五六年九月、萩から江戸の久保田清太郎に宛てた手紙では「塩谷翁の高山・蒲生合伝、御手に触れ候はば御録贈下さるべく候。この文名誉の作なり。水戸に在りて曾て一目す」と記している。[34] 水戸で見たことのある塩谷宕陰（しおのやとういん）の彦九郎と君平の伝記（『高山彦九郎伝』、これには君平の伝記もふくまれる）を写して送ってほしいというのであろう。水戸での滞在中に宕陰の伝記を見たというのは、正志斎らとの会合のときにも彦九郎や君平が話題になっていたからである。六二年前の彦九郎の旅のことが松陰の念頭になかったはずはない。

このような松陰との彦九郎の関係を考慮すると、吉田松陰の号の「松陰」は松陰の生まれ故郷の松本村に因んだもので

あり、彦九郎の戒名「松陰以白居士」の「居士」の符合は偶然であるという説には従うことができなくなる。なにしろ、通称は寅次郎、矩方（のりかた）の名や義卿（ぎけい）や子義（しぎ）の字をつかっていたのだが、奥州旅行からもどった年の暮れからつかいはじめたのが号の「松陰」であった。「松本」の意味が重ねられていたとしても、彦九郎の戒名からとられたとする見方を支持したい。[35]

松陰は人間としての君平、またその仕事も高く買っていた。『不恤緯』や『職官録』を入手し、読んでいた。松陰が処刑された後になるが、叔父の玉木又之進によって主宰されていた松下村塾から『今書』も『不恤緯』も刊行されている。松陰の村塾の弟子であった吉田英太郎へはたまたま英太郎の名が君平の名と同じ秀実であったことから、「抑々吾聞けり、李唐（唐のこと）に段大尉秀実と名のる者あり、近似又蒲生君蔵先生あり、又亦秀実と名のる（君平・君蔵は字）。二子は皆豪傑なり。汝退いて二子の伝を読まば、其れ必ず無逸（松陰が英太郎にあたえた字）の然る所以を知らん」との手紙を送っていた。[36]

松陰だけでない、水戸学の影響をうけた志士たちも彦九郎と君平に敬愛の念を抱いていた。彦九郎の終焉の地となった久留米に生まれ、一八四四（弘化元）年には水戸に留学した真木和泉もそのひとり。杉山忠亮の『高山正之伝』を読み感憤、それを筆写して朝夕朗読、さらに論賛や跋文を加えたという。一八四二年（天保一三）年六月には彦九郎の命日を期して五〇周年忌を挙行した。真木和泉に師事し、真木と同じく討幕の戦いに殉じた平野国臣も遍照院の彦九郎の墓に石灯籠を建てている。

7　教育実践――学校の設立

三人とも遊歴の人間、基本は独学の徒であったが、それが学の本道とは考えていたのではない。遊歴や独学を薦めもしない。三人とも学校教育の必要性を主張する。

林子平の仙台藩では一七三六（元文元）年に藩校養賢堂の前身となる学問所を城内に設立し、一七六〇年には城下に移転して規模も拡大したが振るわなかった。そこで、一七六五（明和二）年、子平は「第一上書」を提出、第一の「学政の事」では、藩校の充実を唱える。教育内容については、朱子学にこだわらなくてもよい、「とかく学問は朱子流も仁斎流も徂徠流も入り不申候物に御座候」とのべている。教育の方針に自由な読書をあげ、そのために四方一〇〇間ほどの敷地に建物を建て、そこに文庫や天文台を設置すべきとし、また、書生のための寄宿舎を設けるべきとした。[37]

「第一上書」が藩当局に無視された子平は、一七八一（天明元）年の「第二上書」をしたため、今回は財政面からの可能性を追求、それには融資による貨殖によって、校舎の普請代、図書費、馬や武具や天文機器の購入費用をまかない、運営資金も貸し付けの利息をあてるべきとした。さらに、「拙者儀諸国を経歴仕候て、国々の事を見聞仕候に、尾州には練兵堂と申候稽古所有レ之候て、諸士に武芸を教へ申候。肥後には時習館と申候学校有レ之候て、文武を教へ申候。備前には静雲寮と申候学校有レ之候て、文武を教へ申候。薩州鹿児島には江戸の聖堂を移し候て、大成殿と申候学校を建立候て教を施し申候」と、遊歴をとおして目にしてきた他国の藩校に劣らない学校を仙台にも設立すべきという。[38]その藩校には、聖堂（図書館付き）、医学校（外科、鍼灸、施薬所もふくむ）、天文台（国暦の出版）のほか、武術道場がなければならない。一七八五（天明五）年に提出した第三上書は、殖産を中心とする富国論であって、とくに教育を論じてはいないが、富国の根本は信義であることを強調する。しかし、同じころに成った『海国兵談』の「第十六略書」では、兵学は治国安民の礎であるが、そのためには、「文武は天下の大徳にして偏廃すべからず」と文武一体の大切さを強調、その観点から文武学校の設立を提唱していた。兵学や富国においても儒教的倫理を見失ってはならないというのである。[39]

これらの提言を藩が採用することはなかった。しかし、子平が世を去った一五年後の一八〇八年、仙台藩は養賢堂の改革に取り組むために大槻平泉を儒官に迎え、一八一二年にはさらに敷地を拡張、兵学、槍、剣の三科を増設する。文武の

学校が成った。その後、医学館を設立、一八二二年には医学館に蘭方科を創設する。結局、子平の提案の線にそって拡充されたのである。吉田松陰も奥州旅行の帰途、養賢堂を見学、その教育体制を日記にひかえていた。[40]

京都の公家との交流が多かった高山彦九郎は公家の学校・大学寮の復興、つまり学習院の創設に尽力した。藩校の設立が進むなかで、京都の公家のためにも律令時代の最高教育機関であった大学寮を再興しようとしたのである。この大学寮の再興は彦九郎が敬愛していた熊沢蕃山が『大学或問』の「学校の師となすべき人の事」で提唱していたことであった。

高山らによって構想されていた学習院は一八四七（弘化四）年に実現された。光格天皇が上皇のとき、次代の仁孝天皇によって設立が決まり、その子の孝明天皇のときに実現したのである。堂上公家（昇殿を許された公家）を対象に「忠孝の道」を教育するのが目的であって、四書五経がテキストに使われた。後には『日本書記』などの六国史が読まれるようにもなった。[41]

『今書』で序序（学校）の充実をのべていた蒲生君平は足利学校の再建にも力を注ぐ。足利学校は江戸時代になって各地に藩校が設立されるようになると、その地位は低下、もっぱら禅宗の僧侶を対象とする学校に変わっていた。熊沢蕃山も『大学或問』でそれを憂慮していた。君平はこの足利学校のなかに儒学を教育する時習館を設立させようとする儒者の松川世徳（北山の門下、君平と同門）の構想の実現に協力している。

一八〇三（享和三）年、江戸に落ち着いた三六歳の蒲生君平は林述斎（大学頭）へ宇都宮藩校設立についての上申書を提出、藩校設立についての理解をもとめた。そこで君平はいう。すでに藩校を設立した藩には紀州と尾張の御三家はもとより、北は仙台、白河、会津、西では熊本、薩摩、長門、安芸、岡山におよび、その他の大小の藩も藩校教育によって仁政を布こうとしている。私の生まれた宇都宮藩は譜代で、幕府のある江戸にも近い。それだけに、率先して藩校を興し、万一のときの備えもしておかねばならない。[42]

しかし、宇都宮藩の財政は苦しい。君平は『今書』で建物はなにも江戸の昌平黌のように壮麗なものは必要はないとの

べていたが、藩校・修道館が実現したのは一八一五（文化一二）年であった。君平の旧師で宇都宮藩の儒官となっていた鈴木石橋は教授に就任する。

8　教育思想

学校設立に努力した三人には共通する明確な教育思想が認められる。ほんらいの儒教精神への回帰である。

藩校の充実を唱えた子平であるが、教育が知育に偏るのをいましめていた。『海国兵談』を脱稿した年に、「哀哉人の父たる者交合して子を生まる事を知といえへも子を教る道を不知也」とはじまる『父兄訓』をあらわしている。教育にあたる父と兄に心構えをのべたものである。そこでも教育は孝悌忠信と勇義廉恥の八徳を基本とすべきであるのに、この基本を知らないために、姑息な知恵の教育に終わってしまうという。[43] だから、「詩文にながれ、博覧を誇り又は唐人風になり或は不身持にしてしかも世人を見下し又は学寮坊主の様になって武士も武芸を不知類の学者多し。是は学者と云ものにあらず、謹むべし」と説く。兵学や富国において儒教的倫理を強調していたのと同じ精神である。

高山彦九郎が姑息な知恵の教育を排したのはいうまでもない。一七七八年、三一歳のとき、細井平洲家に仕えていた萩原子篤が籔孤山のもとに遣わされて熊本にむかうとき、旅での記帳のために自分が使っていた矢立てと硯と帳面を与え、「謹みて聞くべし、学問して賢人君子となりて賢伝聖語を見て学者とのみなる事なかれ、我が願ふ所は道也、つとめて君子となるべし、必らず怠るべからず」との餞の言葉を贈っている。[44] 経典の訓詁に終始する書斎の学者になるのではなく、みずから学ぶことから（孔子のいう）君子とならなくてはならない。与えた帳面には旅のみちすがら、見聞きしたことを控えよ。それが大切な学問なのだ。それは、みずからにも課した、そして終生変わらなかった彦九郎の学問観でもあった。たしか

に高山は最後まで君子であろうとした。自刃する二年前の一七九一（寛政三）年一月八日の日記にも、「仁義を説き忠節を論ずるものは、率ね腐れ学者の通弊にして、能く之を行ふものゝ少きは、まことに哄嘆に堪えず、真に心より出るものゝ行ひでなかりしものは、とるにたらぬものなり、言ひ易く行い難きは是である」と認めていた。[45]

『今書』の「政教」で庠序（学校）の制を論じていた蒲生君平は、そこでの教育のありかたについて、「夫れ、庠序の教えは、豈、必ず、人々詩書を誦し、家々道徳を論ずるのみならんや。蓋し、郷老の善行有り、人の尊信する所の者を選び、立てゝ三老五更（経験豊かな有徳の長老）と為し、之が礼を制し、之が訓を定め、暇の日、轍ち庠序に在り。長幼衆坐をして、歯尚ばしめ、口、能く、前言往行（古人のよき言動）を説き、諄々として、以て孝弟忠信の義を勧め、民をして、自然に、其の教ふる所に化せしむる」という。[46]君平も書物の教育だけでなく、書物の教えを実行した人物による教育を提言している。

「学寮坊主」にならず、儒教の教える君子となるよう学問と実践につとめよ。これら三人の教育思想は、幽谷の「学者（学生のこと）は君子たることを学び、儒者たることを学ぶに非ず」（会沢正志斎『及門遺範』）という学問観・教育観にひきつがれたといえる。[47]幽谷は水戸の自宅で開いていた私塾の青藍舎で会沢正志斎らの門人の教育にあたっていたが、幽谷も、あの「博士」たちのような訓詁学の権威に終わってはならない、儒教の理想とする人間をめざさねばならない、と門人に諭していた。「君子は訥にして、行に敏ならんと欲す」（『論語』里仁篇）である。

とくに彦九郎と幽谷の交友関係を考えると、萩原子篤に「つとめて君子となるべし、必らず怠るべからず」との餞の言葉を贈った彦九郎の教育思想を受け継いでいたように思われる。ただ、そのとき彦九郎も幽谷も多大な影響をうけた熊沢蕃山のことを見落としてはならない。幽谷は『熊沢伯継伝』を書き、「士君子の学は、当に文武を兼ね資り、諸を事業に施し、以て天職を供すべし」「陽明は文武の士なり。良知良能其の放心を収め、学問事業、其の途を二せず」とのべている。[48]『及門遺範』には幽谷の言として、「虚文を後にして実行を先にす」「古は文武一途、未だ嘗て分かて以て二と為さず」と

ある。[49] 幽谷は彦九郎とともに、陽明学の知行合一を打ち出す蕃山からも学ぶことが少なくなかったと思われる。この教育理念は「文武岐れず」「学問・事業効を異にせず」として水戸学の教育理念である『弘道館記』にとりこまれる。[50]

水戸学から強い影響をうけた吉田松陰も江戸の小伝馬町の獄で処刑される直前まで、洋式の軍事技術と尊王攘夷の教育のための学校である「大学校」の設立に心を砕いていた。その松陰がすでに死を覚悟していた一八五九（安政六）年一〇月二〇日に愛弟子の入江杉蔵へあてた手紙では、「朱子学ぢやの陽明学ぢやのとの一偏の事にては何の役にも立ち申さず、尊王攘夷の四文字を眼目として、何人の書にても何人の学にても其の長ずる所を取る様にすべし」とのべ、この点で高山彦九郎と蒲生君平は大切な人物であり、林子平は攘夷においては功績が大きいと評していた。[51] 林子平については、その二年前の一八五七（安政四）年に安芸の儒者である木原慎齋への書簡でも「三宅尚齋・林子平の徒は皆一時の烈士にして、浅人の窺ひ易き所に非ず」と評していた。[52] 三人は松陰の教育目標に据えられていたのである。

9　時代を変えた遊歴

学校教育を重視する三人であるが、三人を育てたのは遊歴であった。武者修行に似て、旅は修養の場であった。幕府や藩の命で動くのではなく、みずからの意志で行動する。だから、旅で出会った人々が友となる。三人が同じ場に会することはなかったようだが、藤田幽谷、木村謙次、藤塚式部、鈴木武助、工藤平助といった共通の知己友人もできた。そこには師弟の隔たりといったものはない。最後まで友であり続けた。三人の遊歴の場となったのは幕府権力の中枢であり、すべての藩の武士が集合する江戸、海外情報の窓口である長崎、改革思想の醸成地である水戸、尊王の聖地である京都、そして南下するロシアの最前線である東北では、政治の中心地の仙台と宗教の中心地の塩釜が活動の場となった。

遊歴は社会の現実も教えてくれる。教育ということでは、各地の藩校の実態も知ることができた。そしてなによりも、飢饉に苦しむ農村を知る。彦九郎の見た飢饉の現実は皇居から一歩も外に出たことのない天皇にも届く。それによって、朝廷が救民救済を申し入れる。朝廷の政治への介入、政治の機構の根幹に変化が現われる。

よく歩く。林は部屋住まい身、高山は農民の次男、蒲生は町人の六男だから可能であったという面はある。そのかわり三人とも貧窮の生活をおくる。国のため、藩のための活動ではあっても幕府や藩からの援助などまったくない。しかし、だからこそ権力にたいして自由であることができた。

それでも、友人たちからの援助があった。それは、三人の活動には打算のない、純粋な動機から出たものだったからである。心を通わせた友人ができ、その友人からの協力があったから活動をつづけることができた。多くの人が路銀を提供してくれ、宿を与えてくれた。出版のことでも協力してくれた。

彼らの思想だけでない。彼らの私心を離れた行動も幕末の志士にひきつがれた。松陰も三人と変わらぬ心をもって、長崎や江戸に遊学し、水戸をへて東北を歩く。松陰の門弟たちも歩く。遊歴の時代はつづいた。久坂玄瑞、高杉晋作、吉田松太郎、赤川淡水ら、そして真木和泉も京都に集結する。そのとき、彦九郎が設立に尽力した学習院は討幕運動の拠点となった。幕府がその基礎から崩れはじめた。

むすび

一九〇三（明治三六）年に制定された最初の国定教科書『小学日本歴史』いらい、国定教科書で「寛政の三奇人」は天皇制国家における模範的人物と見なされていた。しかし、それは天皇制国家での評価である。彼らが生きた江戸時代にさか

のぼって評価をすれば、三人は共通して政治の批判者であった。幕府からみれば、彼らの主張は「異説」であり、行動は「怪奇」であった。三人は政治が根底から見直されねばならない時代に生き、全人生をそれに傾注した奇傑だったのである。荘子によれば、「畸人（奇人と同じ）は、人の畸にして天に侔（ひと）し」、世の人からは離れているが、天に比肩できる人間のことである。三人はその意味での奇人であった。

吉田松陰はみずからを「狂夫」とか「狂狷」と称していた。私心なく生をまっとうするのを「狂」とよんでいた。「三奇人」の「奇」は松陰の「狂」に通う。かたくなに理想を追う「狂狷」の人間であった。「狂狷」とは孔子の言葉だが、その孔子の嫌ったのが「郷原」、周囲に善良を装う小人である。

三人は狂信者ではない。「狂狷」ではあっても狂信的（ファナティック）ではない。戦前の狂信的な国家主義に利用されはしたが、三人は狂信的な尊王家や狂信的な攘夷論者ではなかった。生前から「奇」とも「狂」ともいわれていた高山彦九郎でも「狂信者」とはよべない。民衆の苦しみを救済しようとして奔走し、その対策を天皇に建白しようとした者を狂信といえようか。天意は民意という儒教の教えにしたがって、民衆の意志を天皇に伝えようとしたのだ。それを「狂信」とはいわない。「狂信」とはたとえば、議会の承認がなくても政府は「勅令ノ定ムル所ニ依リ」経済と国民の生活を統制できた「国家総動員法」などを盾に、国民を侵略戦争に駆り立てた軍国主義・国家主義者、それに盲従した官僚や民衆を扇動した知識人たちをいうのである。

彦九郎や君平の尊王論は当時考えられうる唯一の幕府批判のよりどころであった。それは、みずからを「狂夫」と称し、「草莽崛起」を呼びかけた松陰の思想と生き方にも受け継がれた。「奇」は「狂」であり、「草莽」であった。その精神の血は松陰の弟子の久坂玄瑞、高杉晋作たち、真木和泉、平野国臣らにも流れる。そして高杉晋作の草莽の兵士からなる奇兵隊が結成される。

三人は幕府や藩に仕えない身であったからこそ「奇人」でありえ、そこに自由さがあった。が、三人にはそれ以上に自由さをもとめた。体制をその根底から、みずからの意志で批判のでき、行動のできた人間であった。この自由さとしての「奇人」、その意味は現代においても考え直さねばならない問題をはらんでいる。

注

(1) 井上清『日本の歴史・中』岩波書店、一九六五年、五一ページ。
(2) 石井良助『天皇』山川出版社、一九八二年、二四八ページ。
(3) 山県大弐『柳子新論』川浦玄智訳注、岩波書店、七四ページ。
(4) 石川謙『学校の発達』岩崎書店、一九五三年、二二六ページ。
(5) 藤田覚『幕末の天皇』講談社、一九九四年、六五ページ。
(6) 同書、一一三ページ。
(7) 平重道『林子平・その人と思想』宝文堂、一九七七年、一五ページ。
(8) 仙台の魚問屋に奉公していた式部は塩竈神社の社人であった藤塚知直の養子となり、社人を世襲した。養父の知直につづいて山崎闇斎の門下であった吉見幸和に学んでいる（本郷馨『藤塚式部大人伝』一九五三年、柏廼舎）。「万国一地球王只在日本」という印章を使用していたほどの尊王家であった式部は歴史にも精通していた。天文暦法に長じていたという魚問屋の主人利右衛門の影響からか、天文暦法への関心も深く子平が長崎から持ち帰った設計図によって日時計を製作、塩竈神社に設置した。藤塚家は一万巻もの書物を所蔵、子平は利用できたと思われる。
(9) 一〇五ページ。

(10) 『新編林子平全集1』第一書房、一九七八年、八五ページ。
(11) 前掲、平重道『林子平・その人と思想』二四八ページ。
(12) 『高山彦九郎日記・第二巻』西北出版、一九七八年、二六二ページ。
(13) 岩崎良能『偉人蒲生君平の生涯』蒲生神社、一九八五年、一八ページ。
(14) 萩原進『草莽の臣・高山彦九郎』文進社、一九四三年、二三七ページ。
(15) 『高山彦九郎日記・第三巻』西北出版、一九七八年、一六四ページ。
(16) 仲田昭一「高山彦九郎と常陸の人々」『水戸史学』三四号、一九九一年。
(17) 木村謙次（名は謙、酢古館とも、一七五二―一八一一）は幽谷とおなじく翠軒の門下生で、医学を水戸の谷田部東壑に学んだ後、京都の吉益東洞に入門、皆川棋園や柴野栗山の教えもうけた。生地の天下野で医業にしたがうとともに、一七八五（天明五）年には東北を遊歴、塩竈神社の藤塚式部を訪ねている（石巻の多福院の後醍醐天皇を弔った碑も詣でる）。このときには林子平を訪ねた様子はない。一七九三（寛政五）年には藩の事業として武石民蔵と松前に渡るが、その途中、仙台に立ち寄り、書店で『海国兵談』を購入、蟄居中の子平のところに二日にわたって訪ね、蝦夷の問題について尋ねている。これで謙次は「三奇人」全員と会ったことになる。一七九八（寛政一〇）年には幕命による近藤重蔵の北方探検に随行した。謙次も遊歴の人であった。黒羽藩の鈴木武助とも交流があり、謙次もまた農民救済と農村振興にも意をそそぎ、一七八九年には『足民論』を藩主の治保に提出している。
(18) 『日本経済大典・第二六巻』明治文献、一九六九年、四二九ページ。鈴木武助（為蝶軒、一七三二―一八〇六）は藩内外に知られた農政学者。家老職もつとめ、倹約と貯穀により天明の飢饉から藩民を救済することに尽力。『農諭』では彦九郎の報告も斟酌して飢饉の恐怖をのべ、それにたいする平生からの心掛けを懇切に説いていた。
(19) 最終的に幕府から拒否されるのは彦九郎が九州に渡ったあと、一七九三年であった。光格天皇は一八一七年に子の仁孝天皇に譲位して上

皇となり、院政をしく。上皇時代には、学習院の創設が決まる。

(20) 三上卓『高山彦九郎』平凡社、一九四〇年、一五六ページ。

(21) 同書、二四三ページ。

(22) 『下野人物史』下野新聞社、一九七二年、二七五ページ。

(23) 瀬谷義彦『会沢正志斎』文教書院、一九四二年、二三三ページ。

(24) 前掲、岩崎良能『偉人蒲生君平の生涯』一七ページ。

(25) 『増補校訂蒲生君平全集』盛文社、一九三三年、六〇七ページ。

(26) 前掲、瀬谷義彦『会沢正志斎』二三三ページ。

(27) 阿部邦男「蒲生君平の志と『山陵志』の撰述の目的」『水戸史学』四十六号、一九九七年。

(28) 『日本国粋全書・第二〇巻』日本国粋全書刊行会、一九一七年、(『不恤緯』の部分の) 五ページ。

(29) 山崎栄作『木村謙次・下』山崎栄作発行 (十和田市)、一九八七年、五二四ページ。

(30) 前掲、平重道『林子平・その人と思想』二七六ページ。

(31) 前掲、瀬谷義彦『会沢正志斎』二二九ページ。

(32) 前掲、三上卓『高山彦九郎』三五三ページ。

(33) 『吉田松陰全集・第八巻』岩波書店、一九三九年、二七ページ。いまのところ私は会沢正志斎の『高山彦九郎伝』の所在を確認できないでいる。

(34) 同書、五三六ページ。

(35) 中里吉伸「高山彦九郎と吉田松陰」『高山彦九郎研究会会報』第4号、一九九九年。本論によると、松陰は一八五〇 (嘉永三) 年の九州旅

行のときに久留米にも立ち寄っているので、遍照院の彦九郎の墓をたずねている可能性があるという。

(36) 『吉田松陰全集・第四巻』岩波書店、一九三八年、二九七ページ。

(37) 『新編林子平全集・3』第一書房、一九七九年、一九ページ。

(38) 同書、五八ページ。

(39) 『新編林子平全集・1』第一書房、一九七九年、二五九ページ。

(40) 『吉田松陰全集・第十巻』岩波書店、一九三九年、二九七ページ以下。

(41) 前掲、藤田覚『幕末の天皇』一四二ページ。

(42) 前掲、岩崎良能『偉人蒲生君平の生涯』七四ページ。

(43) 前掲、『新編林子平全集・3』九九ページ。

(44) 『高山彦九郎日記・第一巻』西北出版、一九七八年、四一五ページ。

(45) 『高山彦九郎京日記』参龍閣、一九三一年、四五ページ。

(46) 前掲、『日本国粋全書・第二〇巻』(『今書』部分の)一〇二ページ。

(47) 前掲、瀬谷義彦『会沢正志斎』二二六ページ。

(48) 前掲、仲田昭一『高山彦九郎と常陸の人々』。

(49) 前掲、瀬谷義彦『会沢正志斎』二二一、二二七ページ。

(50) 荒川紘「水戸学の思想と教育」『静岡大学人文論集』第五十四号の一、二〇〇三年。

(51) 『吉田松陰全集・第九巻』岩波書店、一九三九年、四八八ページ。

(52) 前掲、『吉田松陰全集・第四巻』三二九ページ。

資料の入手などのことでは、栗田聡さん（水戸市在住）、奥田智子さん（東京都在住）、茂木裕樹さん（塩竈神社博物館）、茂木好夫さん（高山彦九郎記念館）にお世話になった。ここを借りてお礼を申し上げたい。

付記

戦後もしばらくの間、私のまわりの祭りにはまだ江戸時代が生きていた。私の家のなかだけでも、おそらくは江戸時代とほとんど変わりなく、正月、七草、初午、三月と五月の節句、早苗振（さなぶり）、七夕、お盆、月見、恵比須さんなどの祭りがじつに丁寧にとりおこなわれていた。農業と商業の祭りと重なっていたので数も多かったようである。小さいころから祭りの仕事が私の役目になっていたから、数が多くても記憶によく残っている。

たとえば七草、神棚の前の俎に七草（いくつかは他の野菜で代用した）を並べ、擂（す）り粉木（こぎ）で俎を叩きながら、呪文を唱える。いまでも途中までなら呪文を覚えている。初午では、朝早く庭にあったお稲荷さんの祠に、「正一位稲荷大明神」と習字した色紙の流しを立てる。まもなく近所の人たちが、同じような流しを立て掛けにくるので、あっというまに、祠のまわりはさまざまな色の流しでいっぱいになった。恵比須さんの日には座敷にいくつもの恵比須・大黒の像や掛け軸を飾る。とにかく、祭りの日は浮き浮きした気分になった。なによりも、ふだんの貧しい食事とはちがった食事のできる、うれしい晴れの日であった。

お盆は簡略されながらも、いまでも続けられている。迎え火を三つに分けて焚き、玄関には水を張った木の盥を用意して、仏壇を笹で飾る。そこにはホオズキやウドンやワカメを下げ、家紋入りの器一式にいくつもの料理が盛られる。水を供える回数は日ごと、それも午前と午後によって厳格に決まっている。それらの飾りや料理に何種類かの穀物と胡瓜の馬と茄子の牛を供え、裏の川に流す。この仏壇の供えられる料理とは別に、かつては無縁仏のための料理が里芋の葉に載せられて、その脇に供えられた。えらい差別のようだが、今日無縁仏のために料理を供える家がどれだけあろうか。これも一緒に流された。

冬には烏のために、田圃に餅を供える小さな祭りもあった。そのときにも呪文があった。神と仏とも、縁者と無縁者とも、人間と他の生きものとも一緒に生きていた時代だったのである。

お盆のときにはもちろん墓参りとなるが、ここにも江戸時代があった。明治の改葬令で共同墓地に移された江戸時代からの先祖の墓に花と線香をあげねばならない。子供にはその墓を覚えるのは容易でない。代々の先祖の墓だけでなく、それ以外の墓もあった。そのなかに「女学者」とよばれていた墓があった。墓石の三面にびっしりと墓誌が記されているので目につきやすいはずであったが、漢文の墓誌など読んだことがなかった。

その「女学者」を高山彦九郎がたずねてきたことがあるとは聞かされていたが、戦後の教育をうけた私には高山彦九郎とはだれなのかまったく知らない。その「女学者」のことが気になるようになったのは、江戸の教育についての関心から吉田松陰や水戸学についての論文を書き、その流れで、「寛政の三奇人」が意識にのぼった最近である。

そこで先日、その「蓮水覚照大姉墓」の墓誌をひかえてきた。「東奥有女名美勢孝弟天至婉娩自然　加之好学善書畫察其業経史餘力讀　列女孝子諸傳父姓荒川母族角田世　佗白川郡中野村父任其所好求書讀　之余親見行事不可謂不賢才矣竒士　高山彦九郎北游附視才名播世亾何　病死膝下齢二十二鍾情不翅属余碑　陰銘紡績織組之室女別無可記之蹟　好学短命可哀惜豈父母而已哉郷邦　蓋酸愴之寛政三年辛亥五月七日庚戌永訣之日也銘曰　美玉杜斯　未　待琢磨　忽焉碎失　嗟謂之何　天下野人　木村謙撰文」。

彦九郎は「北游」のさい「女学者」の美勢（みせ）に会っていた。それを彦九郎の日記でも確認しようとして、『北行日記』を見ると、寛政二年七月九日の日記には、「塙町巽乾二丁に満たず、庵原六郎兵衛殿陣屋有り、右の方竹ノ内赤坂八幡を経て常世中野村雨谷（あまや）に至る荒川助惣へ入り野口隆琢所に宿す、塙より半里余艮に来る棚倉領也、隆琢の父を玄通といふ中風を患ふ年五十九、隆琢二十歳母は常陸長久保氏の娘也」とあり、その翌日の一〇日には、野口宅で八幡太郎義家の「奥賊退治（龍退治）」の話をしていると、「助惣来り語る、予も至る、助惣娘美せ（美勢）書を読ミ画をなす今二十一歳姉聟渡瀬村赤坂源左衛門所に至りて居らず、赤坂氏も好学人也、渡瀬村は壱里半東也」と記されていた。

彦九郎は水戸藩の大中から天領の塙を通り、棚倉藩の常世中野村雨谷（現福島県東白川郡塙町大字常世中野字雨谷）を訪れて二泊、たしかに「女学者」の美勢に会っていた。常陸長久保氏というのは地理学者の長久保赤水の関係者であろう。その関係で雨谷に宿泊したものと想像される。

「女学者」というのは少々誇張した呼び方だったようである。この時代には経書や史書を読む女性は珍しかったので、「女学者」と伝えられてきたのであろう。それに美勢は彦九郎が訪ねてきた一年後の寛政三年五月七日に二二歳で亡くなっている。それで、どこにも嫁がなかったため、実家に墓がある。

墓誌を撰文した木村謙は医師で探検家でもあり、「三奇人」のすべてと交遊のあった木村謙次のこと、彦九郎に敬意を表してだろう、墓誌でも「奇士」と記す。彦九郎は雨谷を訪ねる前に、天下野村（現茨城県久慈郡水府村）の謙次のところに立ち寄っている。謙次は長久保赤水と親しく、彦九郎は謙次の勧めで野口家に泊まったのかもしれない。彦九郎の遊歴のしかたの一端を伝えてくれる日記である。

本文でのべたように、おそらく吉田松陰は彦九郎の跡をたどるようにして奥州の旅をつづけた。そのとき、彦九郎が私の実家を訪れ、赤水の親戚の野口家に宿泊した約六〇年後、嘉永一二月二一、二日、松陰の『東北遊日記』によると、松陰は、水戸をへて奥州に入る途中に松岡の手綱（てづな）（現茨城県高萩市）に二泊、阿久津家の当主の彦五郎と懇談、彦五郎に連れられて同村の赤浜にある赤水の墓を詣で、その日は磯原の野口家（雨谷の野口家と縁戚関係であったと聞いている）に宿泊している。前稿「教育者・吉田松陰と儒教精神」を書いたときには赤水の墓に詣でたのは、前日彦五郎から地理学者の赤水の著作についての説明をうけていたから、そのためかと想像していたが、本稿を書き終えた今では彦九郎の親友の墓を詣でたと見たほうがよいかもしれないと考えている。

しかしである。松陰が阿久津家を訪れた約六〇年後の明治末、私の祖母が阿久津家から荒川家に嫁いできた。これをどう考えたらよいのか。三年前に私は、『東北遊日記』を読み松陰が阿久津彦五郎と会ったのを知って驚いたのだが、これはありうることであった。彦五郎は松陰とおなじく藩校の武術師範、槍術家であった。海原徹氏は『江戸の旅人・吉田松陰』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）で、萩藩や水戸藩のものが出

入りしていた江戸の道場・練兵館の斎藤新太郎をとおして松陰は阿久津彦五郎の紹介をうけたのだろうとのべている。だが、明治の末になっての阿久津家と荒川家のあいだに縁戚関係が生まれたことについては説明ができない。奇縁としかいえようがない。松陰と彦九郎にたいする私の思い入れがこのような歴史を創造したのか、と思ったりもする。こうして、吉田松陰からはじまった江戸の教育の歴史の旅の最後に思いもかけない歴史の「奇」に遭遇することになった。